

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。また、これまで皆さんの成長を見守ってこられたご列席のご家族、ご関係の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。近年のコロナ禍で、この3年間は保証人の方々、ご家族や関係の方々にご列席いただけなかったのですが、今年度は4年ぶりにご参加いただけることになり、新入生としての入学式での晴れ姿を直接ご覧いただけることをたいへんうれしく存じます。

さて、新入生の皆さんは、いまどういうお気持ちでいるのでしょうか。これからの大学生活への期待もあるでしょうし、いくらかの不安も混じっているかもしれません。大学での年月は、皆さんが独立した社会人となる直前の大事な時期です。そうした時期をこれから過ごそうとしている皆さんに、私から二つのことをお願いしたいと思います。

第一の願いは、広い頭を持っていただきたいということです。広い頭とは、さまざまな事柄について広い視野から考えられる頭のことです。特定の分野について深く考え、突き詰めていくことももちろん重要で、それは学問の基本的なあり方とも言えますが、自己の関心のある事だけを考え、それ以外にはまったく無関心という姿勢は、必ずしも望ましいこととは思えません。その意味で、知的な広い関心と視野を意識的に養っていくことは、ぜひ必要だと思えます。

ちなみに、本学で提供している学びは、単に机の上だけで終わる学問ではなく、実際の社会や生活と結びついた学びであり、その実現のために、正課だけではなく、多様な正課外の活動も提供しています。地域連携や社会貢献活動への取り組みは本学の特色とするところですが、そうした機会も積極的に利用して、生きた学びを重ねてほしいと思います。

それはさておき、「広い頭」に言及した文学作品に、皆さんと同じ大学新入生を主人公にした古典的な小説である夏目漱石の『三四郎』があります。皆さんと同じと言っても、この小説が『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』に連載されたのは明治41年、1908年のことですから、今から115年も前のことになります。当然、現在の大学生とはかなり状況は異なるのですが、この作品には現代にもあてはまると思われる部分が随所に見られます。主人公の小川三四郎は、出身地の熊本から汽車で上京し、東京の大学に入学します。すでに上京する途中から、三四郎は故郷にいたころとはまったく異質な体験をし、カルチャーショックを受けるのですが、その一つに、同じ列車に乗りあわせた高等学校の教員をしている広田先生という人物との出会いがあります。広田先生は三四郎に、「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より頭の中の方が広いでしょう」と語ります。ここで注目してほしいのは、「熊本より東京は広い。東京より日本は広い」という含みを持たせた言い方になっていることです。これは、私たちの頭には本来日本

よりも、もしかしたら世界よりも広くなり得る潜在的な能力があるけれども、そのキャパシティを十分に目覚めさせるためには努力が必要であることを示唆しているように思うのです。皆さんにはぜひそうした広いものの見方、考え方ができるようになってほしい。そのためには、授業だけでなく、ぜひ自ら積極的にさまざまな事柄を知り、それについて十分に考える姿勢と習慣を養ってほしいのです。そうした姿勢を身につけるには、大学や短期大学部で過ごす期間は絶好の時機だと思います。

私からお願いしたい第二の点は、広い頭と同時に広い心を持ってほしいということです。閉鎖的と言われた日本の社会においても、多様な出自や国籍の方たち、また多様な習慣や価値観を持った人たちが交流しながら社会を構成するようになっていきます。ダイバーシティという言葉が盛んに使われるようになって久しいのですが、自分と異なる価値観を持つ人たちと分け隔てなく交わっていくことは、実際には容易なことではありません。しかし、自分の価値観が絶対のものではないことをわきまえ、あらゆる異質な他者を尊重することは、社会の流動性が増していく一方の今後、ますます重要になっていきます。感覚の通じ合う同年代の人たち、話の合う仲間、価値観を共有できる友達との語らいや交流はたいへん快いものですが、そこだけに閉じこもってしまわずに、年齢や文化の異なるさまざまな人々を受け入れ、ともに意思疎通を図っていくこと、端的に言えば、異質な他者を非難し排斥するのではなく、理解し許容しようとする姿勢を持ってほしいと思うのです。その姿勢を養うために、これまでよりもさまざまな人と出会う機会がはるかに増える大学や短期大学部時代はよい訓練の時期だと思います。どうか柔軟な心を育てていってください。

人にとって「頭」と「心」はいずれ劣らざたいへん重要ですが、広い頭や広い心は努力して磨かなければ得られるものではありません。どうかそのことを忘れずにこれからの4年間、または2年間を過ごしてほしいと思います。

専門職大学院社会起業研究科の新入生の皆さんにも一言申し上げます。私事になりますが、私の父は学問とはまったく縁のない人物でした。その父が「一流の傍観者になるより、三流の当事者になれ」とよく言っていたのを覚えています。ですが、どうか皆さんは、「一流の当事者」になって、社会の中で活躍していただきたいと思います。皆さんは現在もっともアクティブな、最も社会から必要とされる領域の一つにおけるエキスパートになろうとしています。一方で、他者への影響も大きく、責任のもっとも重い分野の一つでもあります。他人事としてではなく、つねに「自分の事」として社会にコミットする意識と知識・技術を身につけるよう、研鑽に励んでいただきたいと願っています。

簡単ではございますが、以上をもちまして、新入生を迎えることばといたします。